

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 1 日現在

機関番号：34507

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K01783

研究課題名(和文) 貧困の連鎖を断つ保育の質とは何か 保育指標の開発による同定

研究課題名(英文) Quality of childcare and cutting the chain of poverty -developing childcare indices for identification-

研究代表者

梅崎 高行(UMEZAKI, Takayuki)

甲南女子大学・人間科学部・准教授

研究者番号：00350439

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：経済的な貧困は、教育・文化的体験の剥奪や不適切な養育をもたらし、子どもの発達を深刻に蝕む。支援は早期に為されることで大きな効果を上げることから、優れた福祉機能をもつ保育所の貧困支援が期待されている。取り組みの先駆園を対象としたインタビュー調査から、子どもと保護者が示す貧困のサインがリストアップされた。これら観点は、貧困問題を捉える概念図として整理された。概念図を基にして、人生初期の逆境要因に対し、保育所ができる支援について議論を深めることが期待された。

研究成果の概要(英文)：Poverty deprives children of educational and cultural experience and results in inappropriate childcare practices, which negatively affect children's development. Providing early support is effective, and poverty support provided by nursery schools having adequate welfare functions is expected. Interviews were conducted at pioneering nursery schools that have been dealing with poverty support and signs of poverty shown by children and their parents were listed. These perspectives were organized as a conceptual diagram for understanding poverty problems. The diagram is expected to deepen the discussions on the possible support provided by nursery schools to counter early life adversities.

研究分野：発達心理学

キーワード：子どもの貧困 貧困と保育 貧困のサイン 子どもの発達 社会情動的スキル 貧困対策の先駆園 保育の質 保育者の語り

1. 研究開始当初の背景

(1) 貧困の発見 2009年、政府の調査によって「6人に一人、約16%の子どもが相対的な貧困状態にある」との報告がなされた。多くの市民にとり、生活実態とかけ離れたこの数字は、「貧困の発見」として少なくないインパクトを与えて今日に至っている(阿部, 2012)。Figure 1には、朝日、毎日、読売3紙のデータベースに「貧困」と「保育」の2語を入力して記事を検索した結果を示した。2000年初頭に各紙とも数件であったこの問題への関心は、その後10年ほどの潜在期間を経て、2011年頃から右肩上がりとなり始めた様子が見て取れる。

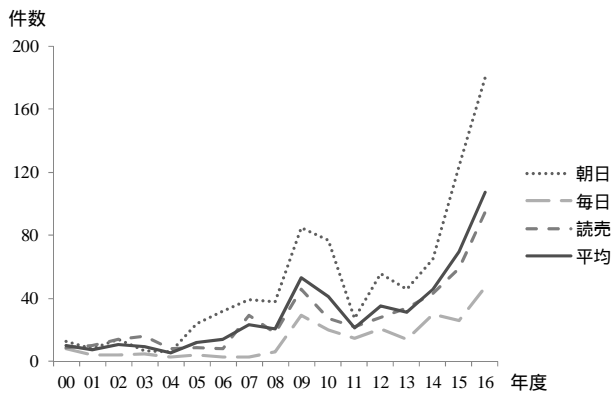


Figure 1 各新聞データベースにおける年度ごとの「貧困 AND 保育」の検索語数の推移

(2) 相対的貧困 相対的貧困とは、人が社会的な存在であることを鑑みて、通常なら社会的に付与される雇用、教育、住居、社会参加の機会から排除されている状態を指す(鎮目, 2011)。多くの先進国で採用される貧困の概念であり(阿部, 2007)、等価可処分世帯所得の中央値の半分以下の収入(国民の所得を高い順に並べ、中央の人の半額に満たない収入)で暮らす家庭が、この状態に相当すると考えられる(2015年のわが国では、122万円が相当した)。基準はア・プリオリなものであるが、このように指標を決めることによって、貧困が子どもにもたらす発達上のリスクを同定していくことができる(菅原, 2014)。

(3) 貧困と発達 家庭の経済状況が子どもの発達を阻害するプロセスは、2つのモデルで理解されると考えられている(阿部, 2006; Duncan & Brooks-Gunn, 1997; Huston & Bentley, 2010; 菅原, 2012)。一つはFamily Investment Model (FIM: 家族投資モデル)であり、家庭による教育や文化的体験に対する投資の低さが子どもの成長の機会を奪うモデルである。もう一つはFamily Stress Model (FSM: 家族ストレスモデル)であり、経済的困難にある養育者のストレスを介して子どもの健康や発達が脅

かされるモデルである。いずれも介在要因を経て子どもの発達に深刻なダメージが及ぶというプロセスが想定されており、こうした状況下にある子どもへの支援は、より低年齢で施されることによって効果が大きいことが、ノーベル経済学賞を受賞したヘックマンらの研究によって支持されている(Heckman & Masterov, 2007)。

(4) 保育所への期待 そこで近年では、貧困対策のプラットフォームとして、子どもが通う学校・園への期待も高まっている(浅井, 2017)。中でも保育所は、発達の極早期に、もとより優れた福祉機能をもつ施設として子どもと家庭の身近に設置されている。実際に、貧困下にある子どもの防波堤として機能する園の保育実践も報告されつつある(平松, 2016; 塚本, 2016)。これら取り組みの一方で、待機児童対策が中心であった保育所保育では、貧困家庭に目を向ける余裕やノウハウをもたない可能性も考えられる。こうした背景から、先駆的な保育所で蓄積されてきた経験また気づきの視点を共有して、経済的に厳しい状況にある子どもの発達を広く支えていくことが求められている。

2. 研究の目的

福祉機能を発揮して経済的貧困下の子どもに対する支援を行う保育所保育も報告される中、保育所による支援全体は、「子どもの貧困」の発見以降、途に着いたばかりである。各園が置かれた地域による認識差も依然大きく(Votruba-Drzal, Miller, & Coley, 2016)、保育所にとって今後の行動指針となるような提案や示唆が求められている。

こうした状況下において、先駆的な保育所が蓄積してきた貧困問題への対処経験や、経験を通して編まれた「いかにして貧困家庭に気づくか」といった視点は、これから対策に乗り出していくことが望まれる新しい園にとっても参考となるに違いない。そこで本研究では、貧困対策を先駆的に実施する園へのインタビュー調査から、貧困問題の早期発見・早期対応に資する視点の抽出を目指す。とりわけ先駆園が気づきの手がかりとして用いる貧困のサインに目を向けて、これをめぐる語りから、貧困支援における保育所の可能性を探る。

3. 研究の方法

本調査に先立ち、また並行して、予備・関連調査が実施された。これら3本の調査により、保育所を対象とした本調査の意義と課題(予備調査1)、保育における貧困の実際(予備調査2)について確認されるとともに、個人情報保護の観点から、当初計画の見直しとその対策が施された(関連調査1)。

(1) 予備調査1 2015年7月、東京都A市の保育行政部署を訪問し、当該部部长B氏と

副主幹C氏を対象としたインタビュー調査が実施された。A市では、コーディネーター(C氏)を配置して市が市立全園を統括し、貧困の問題を含む地域の子どもと家庭のニーズを把握しながら保育を進めている。

調査の結果、市の組織的取り組みについては「保育士がその、保育のこと...だけを知っている、以外に、いろんな周辺状況を理解をしとくってというのは、やっぱり大事」(C氏)であり、その結果、「保育園に行ったら、われわれソーシャルワーカーの立場で言うと、ほっと一安心なんです」(B氏)という認識が示された。これらは保育所が貧困問題に寄与する実態を示した語りであり、保育所を中心とした対策の意義や可能性が確認されるものである。一方、「学校行ってからの方が、こうした問題が大きく、差が言うか、それぞれのご家庭・お子さんで、出てきちゃうのかなって言う、思いますけど」(C氏)、「あるいは小学校高学年くらいになってから、そこが、非常に顕著に現れるのかなって思います」(B氏)といった語りも得られ、就学期以降を見通した支援の必要性も示された。

(2)予備調査2 2015年4月~2016年3月、大阪府D市の幼保連携型認定こども園私立E園のうち、年少3歳児6クラス(担任6名、園児約120名)を対象として観察調査が実施された。観察では、各クラスの担任から選出された気になる子ども(特別支援児を除く)が取り上げられ、デジタルビデオカメラを用いて撮影された。この映像は3分程度に編集されて、観察から1週間後に行われる園内研修の題材として活用された。研究者は園内研修のファシリテータも担い、園長・教頭らと共に、気になる子どもをめぐって保育者自らが設定した課題の解消を支えると同時に、子どもをめぐるとの対話から、背景となる家庭状況について情報を得た。一年間で延べ24クラス(一クラス各4回)について実施された園内研修では、気になる子どもの家庭状況として、家庭の経済的状況の悪さにも言及されるケースが見られた。これら園児を対象に園の保育と、子ども自身の発達を検討する予定であったが、個人情報保護の観点から研究成果の公表には至らなかった。

(3)関連調査1 2016年4月~2018年3月、保育所等を通じて協力を依頼し、1-2歳児をもつ約350家庭から縦断調査への登録を得た。調査は子どもの社会情動的スキルの発達に及ぼす子どもの内的/外的要因の解明を目的とし、主に質問紙を用いて、外的要因としての家庭の経済的状況や子どもが通う園・学校の状況を尋ねている。調査は今も継続され、先行研究で明らかにされるように経済的な状況が子どもの発達に悪影響を及ぼすとして、その場合に機能する補てん要因は何かを検討している。また、観察調査や実験調査を組み合わせて、生態学的に妥当なエビデンス

の収集を意図している。

(4)本調査 これら予備・関連調査を踏まえて本調査が計画・実施された。

(4-)調査時期 2017年3~4月、2017年9月であった。

(4-)対象地域・園 関西地域12園、九州地域3園の計15園(公立3園、私立12園)であった。宗教法人や夜間保育園など、多様な特徴をもつ園を含めるよう意図した。

(4-)対象者 保育所長や当該問題担当保育者19名(平均保育歴26.29±11.89年)から協力を得た(Table 1)。

(4-)リクルート 対象者に依頼し、当該問題に詳しい保育者の紹介を得て協力を依頼する雪だるま式サンプリングを採用した。

Table 1 協力園・協力保育者一覧

地域	公立・私立	特徴	役職	保育歴(注)
関西	私立		地域貢献支援員	23
			副園長	-
関西	私立	キリスト教	園長	25
関西	私立		園長(元公立園長)	40
関西	私立		園長	30
関西	公立		園長	30
関西	私立		園長	8
			副園長	8
関西	私立		園長	30
関西	私立		園長	-
関西	私立	キリスト教	園長	23
関西	公立		元所長	38
関西	公立		元所長	40
九州	私立		園長	8
関西	私立	夜間	元園長	42
九州	私立	仏教	園長	-
九州	私立	夜間	理事長	-
			園長	23
			常務理事	-

(注) 保育歴を確認できなかった対象者はブランクで示した。平均保育歴はこの対象者を除いて算出した

(4-)調査内容と手続き

予備調査1を経て整理された図(Figure 1)が用いられて調査の趣旨説明がなされた。このときインタビューの録音についても許可を得た。インタビューでは(あ)貧困家庭に対する対応の具体例、(い)貧困のサインに対する重篤度評価、(う)貧困家庭と一般家庭の相違、(え)保育所が行う貧困支援の可能性と限界について尋ねられた。得られた語りは逐語化され、当該問題を把握する概念図として整理が目指された。

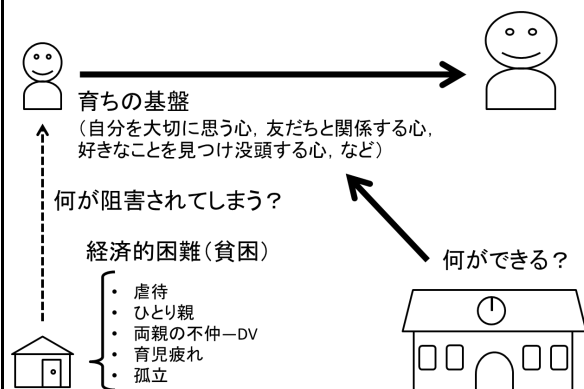


Figure 2 説明趣旨に用いられた図

なお(い)貧困のサインとは、保育者が家庭の貧困に気づく兆候として用いる項目(各5項目)を指し、先行研究(平松, 2016; 塚本, 2016)よりリストアップされた。保護者と子どものサインそれぞれを用意して、自身の経験に照らした重篤度を、1点(低)から5点(高)で評価するよう依頼された。調査では、用意した5項目以外にもリストに加えるべきサインがないかについて尋ねられた。

4. 研究成果

(1) 貧困のサインの重篤度評価(保護者)

各園の回答から平均値を算出し、順に並べた(Table 2)。項目「欠席しがち」は15園中9園が5点(重篤度が最も高い)と評価した。典型的な語りとして以下を挙げる。「欠席しがちいうのもすごい気になりますよね。(略)登園時間がバラバラっていう前に、来る前に欠席しがちになってしまうと思います。もう、行くのが邪魔くさくなるというか、保護者の方が、遅くなくても来てくださるの方が、やっぱり、子どもには、あれですかね(a園A先生)」。一方、この項目の評価を1点とする語りも見られた。「私のところの場合だと欠席しがちってのはあんまりないですね。だってお母さんも来ての方が楽し、子どもが来ての方が(c園D先生)」。

Table 2 貧困のサイン(保護者)

項目	M(SD)	保育者の回答例(上:重篤度5,下:重篤度1)
欠席しがち	4.07(1.49)	行くのが邪魔くさくなる というか(A先生) ----- お母さんも来ての方が 楽し(D先生)
洗濯されていない	3.71(1.27)	衣類がいちばん でかいかな(G先生) ----- 30年くらい前までは(略) 結構あったんですが(O先生)
登園時間バラバラ	3.57(1.60)	登園時間とかは 気になりますよね(E先生) ----- すぐ遅く来る方が 気になりますね(F先生)
忘れ物多い	3.14(1.35)	子どもの無関心に 関係してくるので(C先生) ----- 親の対応だったですね。 (性格?)そうそうそう(N先生)
持ち物記名ない	2.64(1.15)	(5評価なし) ----- 持ち物、こない (注:大したことない)やる(O先生)

(2) 貧困のサインの重篤度評価(子ども)

保護者同様に、子どものサインに対する各園の回答から平均値を算出し、順に並べた(Table 3)。項目「あざがある」は15園中11園が5点と評価した。典型的な語りとして以下が見られた。「あざがあるのはとっても大変ですよ。あと大人が何気なく手を上げたときにこうなる(頭を守るような動作をする)のは、不安が強いつてことでこれもちょっと、危ないですよ(e園F先生)」。一方、この項目の評価を1点とする語りも見られた。「(そのような虐待は、必ずしも経済的な問題)ではない!ない!ただ、やっぱり私も見つけにくい。最近ではこの親、正常かなって見方も必要かなって思いましたもん。(親の発達障がい?)そうそうそう。貧困やからそうなるんじゃない(m園O先生)」。

Table 3 貧困のサイン(子ども)

項目	M(SD)	保育者の回答例(上:重篤度5,下:重篤度1)
あざがある	4.43(1.22)	あざがあるのはとっても 大変ですよ(e園F先生) ----- (虐待は経済的な問題...) ではない!ない!(O先生)
不安が強い、落ち着きがない	4.29(0.99)	やっぱりそれはサインやと 思いますわ(L先生) ----- (1評価なし)
朝から覇気がない・元気がない	4.21(1.12)	ご飯も食べてない、お母さんも 朝起きるのが遅い(D先生) ----- (1評価なし)
異常な食欲、特徴的な眠り方	3.86(1.35)	月曜日のね、お味噌汁の売れが すごくいいんです(H先生) ----- それは貧困とは 関係なしやわ(O先生)
大きい音や人の出入りに敏感	3.07(1.44)	出入りだったり、(略)注視する(略) ----- ことが多いです(A先生) ----- これはあんまり気が つかないですけど(E先生)

(3) 加えるべき他のサイン

保護者で4項目、子どもで9項目のサインが新たに提案された(Table 4)。たとえば保護者では「話したくなさそうな雰囲気」が付け加えられた。この語りとして以下が見られた。「子どもよりもやっぱり、お母さんですね。お母さんが、なんか暗いだとか。あの、先生に喋らない。こう、喋りたくないオーラ、を出されてる方(k園M先生)」。

また子どもでは、「タバコの臭い」が加えられた。関連する語りとして以下が見られた。「お風呂に入っている様子がなくて、着ているものも、荷物も、すべてすごくタバコの臭い、だったんです(i園K先生)」。

Table 4 加えるべき他のサイン

保護者	話したくなさそうな雰囲気 食事の量と質 発達障がい 恋人が現れる
子ども	タバコの臭い 髪の毛の未手入れ(未洗髪) 未洗浄の食器 乱暴な言葉遣い 先生から離れない 降園を嫌がる 体験が薄い 自己表現ができない 泣き方が特徴的

(4) 概念図の提案

以上、先行研究を参考に用意された各5項目と、新たに加えられた計13項目の他に、子どもの貧困に気づく視点として「変化」に着目するという語りが得られた。また具体的行動として「子どもに聞く」という語りも得られた。「変化」にかかる語りとしては以下が見られた。「衣類の洗濯がなされてないってのは、ときどきあるんですけど、だいたい

決まってきてるので。それも、突然そうなる人はあまりないんですよ(i園K先生)。「日頃の日常見て、その重篤なね、困難家庭とは判断してなかったら、ま、お母ちゃん忙しいから洗濯してへんって言うくらいで捉えてますし(j園L先生)。」

また「子どもに聞く」にかかる語りとしては以下が見られた。「3歳くらいになってきたらね、子どもも喋りますからね、ある程度。もう聞きますわ。昨日なんかあったんってね(a園B先生)。「子どもが言いますからね、誰々くん(母親の恋人)がって(笑)。どこどこ行ったとか、お母さんのこと叩いたとか、そういう情報って、子どもから出てくるんですよ(g園I先生)。」なお「子どもに聞く」については、「話さない場合もある」という対極の語りも得られた。「たぶん、あまり言わないと思いますね、どっちかと言うと(e園F先生)。「両方です。(子どもに)よりも。で喋らない子は絶対喋りませんね(j園L先生)。」

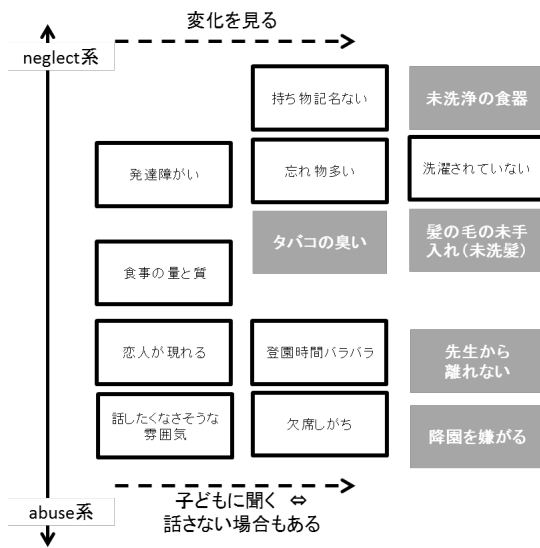


Figure 3-左 貧困のサインの相互関係図 (囲みは保護者のサイン, 白抜きは子どものサイン)

以上の重篤度評価やサインをめぐる立場の異なる語りを総合的に勘案し、Figure 3が整理された(紙面の都合により分割して示した)。この図は、研究の当初目的であったチェックリストとしての整理に比べ、貧困問題の全容を把握し、各園で在園児の一人ひとりに目を向けるに当たって有効と考えられた。

関係図では、子どもの内的(internalizing)/外的(externalizing)問題傾向にかかる家庭の養育として、本調査でも貧困との関わりが証言された neglect系と abuse系の2つの不適切な養育行動が想定されている。同時に、当該問題に対する視点としての「変化への着目」と、「子どもに聞く」という保育者の具体的行動が加えられた。この関係図に示されたように、保護者のおかれた状況や障がい、他には子どもの気質なども考慮して、サインを複眼的に見ていくこと

に加え、これら現象の頻度に目を向けていくことが求められる。この図を基礎資料とし、人生初期の不利に対し保育所ができる支援について、続く議論が期待される。

(5) 今後の課題

保育所が貧困対策を進める上で、公的基金の投入が欠かせない。このためにも実証的な研究によるエビデンスの提出が求められる。調査で得られたように、保育所(子どもの乳幼児期)において貧困問題が発露するケースは稀である。貧困による体験や人間関係の希薄さは、就学期以降に顕在化しライフチャンスを蝕んでいく。このように「問題が見えない」からこそ、関係図を基に縦断的なデザインによって貧困の影響を可視化する研究が求められる。

最近ではわが国でも、大規模縦断調査によって幼少期の経済的不利が、その後の発達に与えるマイナスの影響について報告されつつある(たとえば Hosokawa & Katsura, 2017)。



Figure 3-右 貧困のサインの相互関係図(続き)

今後はこのような研究の中で乳幼児期の保育の質を変数として扱って、逆境を補う保育要因についてのエビデンスを提出していくことが求められる。これは大規模調査が明らかにする貧困による負の連鎖を、具体的に対策し断ち切っていくために必要であると同時に、本調査に協力を得たような貧困対策先駆園の実践知を広げる上でも役立つだろう。先駆園にとって貧困とは、「保育所ではね、たとえばすごく年収1,000万のある家庭のお子さんと、年収200万のお子さんと、対応全然違うんかって言ったらそんなの全然関係ないですからね。まったく一緒なんですよ(j園L先生)」と認識されるものでもある。このようにこれまでも保育から子どもの貧困が顕在化を免れた可能性はあり、同様の支援を広げる実証的な知見が求められる。本調査で着手された縦断調査(関連調査1)も、今

後その一端となることが期待される。

<引用文献>

- 阿部 彩 (2006). 相対的剥奪の実態と分析 日本のマイクロデータを用いた実証研究 社会政策学会 (編). 社会政策における福祉と就労 (pp. 251-275) 法律文化社
- 阿部 彩 (2007). 日本における社会的排除の実態とその要因 季刊・社会保障研究, 43, 27-40.
- 阿部 彩 (2012). 「豊かさ」と「貧しさ」: 相対的貧困と子ども 発達心理学研究, 23, 362-374.
- 浅井 春夫 (2017). 保育と子どもの貧困 発達, 151, 13-18.
- Duncan, G. J. & Brooks-Gunn, J. (1997). *Consequences of growing up poor*. Russell Sage Foundation.
- 平松 知子 (2016). 人生最初の 6 年間で育めるもの 保育所保育から見る貧困と福祉 秋田喜代美・小西 佑馬・菅原 ますみ (編著) 貧困と保育 社会と福祉につながる, 希望をつむぐ (pp. 54-74) かもがわ出版
- Heckman, J. J., & Masterov, D. V. (2007). The productivity argument for investing in young children. NBER working paper No. 13016.
- Hosokawa, R., & Katsura, T. (2017). A longitudinal study of socioeconomic status, family processes, and child adjustment from preschool until early elementary school: the role of social competence. *Child and adolescent psychiatry and mental health*, 11.62.
- Huston, A. C., & Bentley, A. C. (2010). Human development in social context. *Annual review of psychology*, 61, 411-437.
- 鎮目 真人 (2011). 社会保障・社会福祉政策部門 (2011 年度学会回顧と展望) 社会福祉学, 53, 126-139.
- 菅原 ますみ (2012). 子ども期の QOL と貧困・格差問題に関する発達研究の動向 菅原 ますみ (編著) お茶の水女子大学グローバルCOEプログラム格差センシティブな人間発達科学の創生 第1巻 子ども期の養育環境と QOL (pp. 145-165) 金子書房
- 菅原 ますみ (2014). 貧困と子どもの QOL 児童心理学の進歩, 53, 221-241.
- 塚本 秀一 (2016). もう一つのおうち 養護を中心とした福祉としての保育 秋田ら編 (既出) (pp. 76-93) .
- Votruba-Drzal, E., Miller, P., & Coley, R, L. (2016). Poverty, urbanicity, and children's development of early academic skills. *Child Development Perspectives*, 10, 3-9.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

- 梅崎高行・高 向山・山際勇一郎・青柳 肇 (2018). 貧困のサインをめぐる保育者の語り: サインの相互関係を示す概念図の提案 人間科学研究 (甲南女子大学), 査読無, 54, 43-58.
- 梅崎高行 (2017). 対話的保育と同僚性 人間科学研究 (甲南女子大学), 査読無, 53, 27-36.
- 梅崎高行 (2016). 対話的保育 人間科学研究 (甲南女子大学), 査読無, 52, 25-33.

[学会発表](計4件)

- 前川浩子・酒井 厚・眞榮城和美・梅崎高行・高橋英児 (2017). 子どもの社会情動的スキルの発達 子どもの自己と対人関係の発達に関する縦断研究 日本発達心理学会第28回大会
- Takayuki UMEZAKI, Mai KOMINATO, Xiangshan GAO, Yuichiro YAMAGIWA, Hajime AOYAGI. (2017). Factors related to parenting in Japan, China, and Korea (1): Physical aspects. 18th European conference of developmental psychology.
- 梅崎高行・高 向山・山際勇一郎・青柳 肇 (2017). 保育所で用いられる貧困のサインに関する探索的研究 日本心理学会第81回大会発表論文集, 878.
- 梅崎高行 (2015). 発達を踏まえた保育実践 3歳児を対象として 第6回幼児教育実践学会

[その他]

日本子育て学会第7回大会開催 (甲南女子大学), 大会テーマ: 子どもをとりまく「貧しさ」に、いま、できることを考える

6. 研究組織

(1) 研究代表者

梅崎 高行 (UMEZAKI, Takayuki)
甲南女子大学・人間科学部・准教授
研究者番号: 00350439

(2) 研究分担者

山際 勇一郎 (YAMAGIWA, Yuichiro)
首都大学東京・都市教養学部・准教授
研究者番号: 00230342

青柳 肇 (AOYAGI, Hajime)
早稲田大学・人間科学学術院・名誉教授
研究者番号: 20121056

高 向山 (GAO, Xiangshan)
常葉大学・健康プロデュース学部・准教授
研究者番号: 60410495